

SMGLレポート 2210ーその1

※ ジャンルごとに、毎回テーマを変えてご案内します。

【社内リスク】 未熟型うつ病の見えざる脅威①

未熟型うつ病※1(もしくは「新型うつ病」)が、どうやら蔓延し始めているようです。「蔓延し始めている」という表現を用いた背景には、次のような事情があります。様々な症状を呈する「うつ状態」の中から、負けず嫌いで他罰的(自責の念に乏しく自己中心的)、仕事への選り好み激しく、自分に合えば澆刺として取組むが、嫌いな業務だとうつ症状を呈する一等々の共通項が括り出され、それに「新型」「未熟型」の名称が付されたのをキッカケに、この分類での報告が増える一方で、一先ず「うつ病」一般の中に放り込まれていた所属先不明の症状が、配属先を得てカウント対象として加わった事から**区分の移動による見かけ上の件数増加現象**が生じた結果と言うだけでなく、「**休職中**」にも拘らず、**海外旅行に出かけ**、或いは**資格取得の受験勉強**をしていた等々、およそ**社会規範に外れている**としか**思われない事例**が「未熟型」の**治療効果**という文脈の中で報道されるに至る程、**顕在化し始めている**という現実がある為です。

※1 学会主流派が主張する「未熟型」とは「過保護な生育環境に育った依存体質の強い青年が、20代後半以降、家庭生活や職業生活で遭遇した初めての挫折感から発症するが、それが自己責任・自己嫌悪に向かわず、自己中心的で、他への攻撃性が強く現れる症状を呈するものを云う」とされており、「会社のせいであんなった”レジャーは症状改善に役立つという医師の勧めもある”等という主張が為される例もあるようです。

「未熟型うつ病」は、その命名により現代病の一つ、**一つの症候群として医学的、学術的市民権**を得ました。けれども、その治療法については今のところ、「海外旅行も効果的では」程度の極めて曖昧な手さぐりのものでしかなく、**社会的に認知されたとは到底いえない状態**ではないかと思われます。それを端的に物語っているのは、「未熟型」がたとえつきとした病であっても、外見上又は素直な市民感覚では、**我儘な怠け者**としか映っていない(ネットの書き込み等を検索すると、それが良く判ります)という事です。事実上そのようにしか受け取られていないのであれば、大方の理解が得られないのは明らかであり、理解が得られなければ、病者を労わり、その社会復帰に向けた協力態勢を整えることなど、できる筈がありません。殊に、上記事例のようなケースをも治療の一環として受け入れるよう求められる局面に至ったときは、就労する側から見て**社会的不公平さ**が強く意識される結果、組織にひびが入り、事業運営に支障を来たすであろう事は、容易に想像できる処でしょう。「未熟型」患者の出現は、患者自身やその関係者に留まらず、その者が所属する**単位集団**はもとより、ひいては**組織全体**にも及ぶ**目に見えない脅威**となる可能性すら孕んでいると言えます。では、こうした事態に対処する為、事業者としては一体どのような備えを講じるべきなのでしょう。次稿では、その具体策について検討してゆきたいと思ひます。